

# 北海道の元気! NPO訪問

11 NPO法人 富らの演劇工房

文・加藤知美

## 演劇のまち富良野を支えるNPO第一号 地域性活かし次世代見据えるまちづくり

◇ 地域に根付いた演劇の素地と可能性

現在、さまざまな分野で活動を展開するNPO法人の数は、全国で四万をこえようとしているが、一九九九年に国内第一号として法人格認証をうけたのが、富らの演劇工房だった。演劇をテーマにまちづくりの活動を展開し、二〇〇〇年からは富良野市より富良野演劇工場（劇場）の管理・運営を受託している。

富良野盆地を囲む山や森、川などの表情豊かな自然の中にある小高い丘に、周囲の自然と調和した深緑色の富良野演劇工場が建っている。三〇〇の客席は程よい傾斜でどこからでも見やすく、奥行きのある深い舞台とともに独特な空間となっている。それだけではない。バックヤードに回れば大道具制作スペースや衣装室、楽屋などが充実していて、「見る劇場」としてだけでなく「創る劇場」であることがわかり、工場のネーミングもうなずける。富良野といえば、脚本家・倉本聰さんの存在抜きには語れない。二六年間にわたり主宰してきた富良野塾は今年四月閉塾するが、多くの若者が巣立ち、俳優や脚本家として活躍しているほか、富良野の地にとどまり生活が続ける人も多い。富良野塾卒業生らによる演劇集団「富良野GROUP」は、この富良野演劇工場を拠点にロングラン公演や全国公演をおこなっている。

こうして芝居を見たり公演を手伝ったりするなど市民が演劇に関わる素地があるなか、創作活動を支援すると同時に、演劇を核にした市民の文化活動、さらにはまちづくりにつなげていくのが「NPO法人富らの演劇工房」の活動だ。演劇の持つ「創る」「癒す」「育む」という可能性に着目し、子どもも大人も楽しめる「演劇のまち富良野」を目指している。

◇ 演劇を核とする人材育成と文化活動支援

演劇を市民にとつてより身近なものにするため、公演のほかワークショップを開催したり、舞台美術や音響・照明などのセミナーを通じて、演

劇に関わる市民を増やしている。また、演劇の要素のひとつであるコミュニケーション能力を高めることで、高齢者などを対象に心と体の回復を図る演劇リハビリテーション事業にも当初から取り組んでいる。ボランティアによるサークル活動も盛んだ。上演がある際の際のチケットもぎりや売店・喫茶運営、駐車場誘導などのボランティアにとどまらず、劇場を使つての表現活動などをテーマに、市民劇団、ゴスペル、朗読、映画、手芸などのサークルがある。学校演劇の支援にも力を入れている。市内や周辺市町村の小中学校などに、富良野塾OBなどが出向いて演劇指導をおこない、一〇月上旬の連休時に「富らの演劇祭」として富良野演劇工場で上演する。また、同じ期間に「富良野演劇工場まつり」も開かれ、ボランティアによるサークル活動



富良野演劇工場

の発表の場として舞台やロビーがにぎわう。

演劇によるまちづくりを担う人材育成事業としては、「市民企画支援事業」を実施している。市民が、演劇、コンサート、映画上映などをプロデュースするのをNPOが支援しながら本番を迎える仕組みだ。公演は、企画から始まり、予算、スケジュール、役割分担、当日の人員配置、食事の準備などさまざまな実務が伴う。終了後も、うちあげ、報告書作成、決算などの過程があり、これらを市民による実行委員会がNPOのアドバイスをうけながら主体的に担う。年間六本の企画が進行するこの事業では、会場使用料が免除になるが赤字になれば実行委員会メンバーで負担することになる。

### ◇ 誇りあるまちを次世代に、次の一〇年の展望

こうした多様な活動の展開により、劇場の年間



公演時の喫茶やグッズ販売はボランティアで

稼働率は七五%にまでなったが、公設市民営の劇場運営は前例がなく、すべてが手探りだった。当時の市長公約に劇場建設が掲げられて以来、従来の公立ホールとは違う新たな発想の劇場づくりのために市民が奔走した。創作活動の拠点とするためには、三六五日二四時間使えること、長期の稽古期間を連続使用できることなどが必要だった。同等規模の岩手県湯田町（現・西和賀町）の銀河ホールを視察し、年間運営費のシミュレーションをおこなった。現在は劇場の指定管理者として五年間の委託契約を結び、年間の委託料は二〇〇〇万円。貸館料収入とあわせても三〇〇〇万円に届かないが、NPOとしては、このほか富良野文化会館の管理業務委託料や、地域創造事業補助金、寄付金、会費収入などでまかなっている。

アルバイトを含め五名のスタッフが、劇場の管理、音響・照明、経理など日々の業務に追われている。そうした現場をサポートするのは一三名の理事だ。毎月必ず理事会を開き、時には三時間近くに及ぶ議論で、NPO活動の方向性の検討から財務状況の確認、諸問題の解決までを徹底的に話し合う。設立から一〇年たち、NPOマネジメントや劇場運営のノウハウが蓄積できたという。

次の一〇年に向けて大きな夢がある。富良野の高校に演劇科を設置する提案がでている。公立高校の演劇科は全国でも二校ほどしかなく、実現すれば、全国から「演劇のまち富良野」として注目が集まり、富良野演劇工場を活用した新たな教育をNPOが支援することになる。演劇は、演技による表現のほか、音楽、照明、舞台美術、戯曲など様々な芸術表現を含む総合芸術だと言われている。

る。知識偏重を脱して夢のある教育の場にNPOが関わり、地域で子どもたちを育てることになる。

ふらの演劇工場の藤田嗣人理事と太田竜介



藤田理事（左）と太田工場長

工場長は、口を揃えて、「富良野は恵まれていますが」と言う。倉本聰さんの存在はもちろんのこと、盆地という地形が持つ非日常性にいたるまで演劇のまちにふさわしい環境がある。スキー場や観光地としての魅力は、多くの観光客や修学旅行をよびこみ、富良野GRANDUPロングラン公演にも有利だ。富良野では、かつてゴルフ場だった場所にも木を植え森に還す取組も倉本聰さんがすすめている。成果が見えるのは自分たちのあとに続く子どもたちの世代のことである。同様に、演劇によるまちづくりの活動によって、もっと先の世代の子どもたちが誇りをもてるまちにしたいという熱い思いを語ってくれた。

### ◆ NPO法人ふらの演劇工場

所在地 富良野市中御料

TEL 016712213800

WEB <http://www.furanone.jp/engeki/>